「シティズンシップ」獲得モデルの構築に関する研究
―「社会人学生」を対象とした質的調査の結果から―

本村めぐみ[1]

（2006年10月31日受付，2007年１月15日受理）

A Study on the Construction of Acquisition
―Model of the Citizenship based on the Analysis of Qualitative Research Data of College Students with Jobs in Society―

Megumi MOTOMURA[1]

(Received : October 31. 2006, Accepted : January 15. 2007)

要　旨

本研究の目的は，若者の自律意識を形成するための重要概念としての「シティズンシップ」が，学校領域や社会領域において，どのようなプロセスを辿りながら獲得されるかを，社会人学生を対象として質的に把握することである。調査対象者は，某公立短期大学に通う社会人学生９名である。方法は，インタビューによる質的調査法である。厳密には標準化しない半構造的な質問項目を用い，調査者と対象者の間の相互作用による新しい価値の創出を目指してアクティヴ・インタビューを採用した。その結果，①社会人学生が「社会領域」から学校という「中間領域」に戻る経験が，多様なシティズンシップの知識とスキル，意識を獲得する契機になっており，②「シティズンシップ」は，「私」・「中間」・「社会」という異なる３つの領域における「かかわりあい」の模索を経由しながら獲得されると考察された。また，各々の領域間の自在な往復によってシティズンシップは強化され，社会領域で「発揮している」という自覚に至る。

キーワード：シティズンシップ，社会人学生，シティズンシップ獲得モデル，アクティヴ・インタビュー

Abstract

This paper attempted at clarifying how the "citizenship" which is considered as important requirements for college students who work by day and attend night school in night time to develop the "consciousness of autonomy" at the life areas of school and work place are acquired. The subjects of this research were nine college students attending night school. For construing the acquisition-model of the citizenship, the qualitative data was collected by semi-structured active and reflexive interviewing method in which the interviewer and interviewee can be interacting to create the new values.

The findings derived from the analysis of the qualitative data suggested the following hypothetical propositions. 1) For the subjects, their experience of coming back again to the area of school life, which are intermediate between the family so called private life area and the work place representing their public life area, will be a big chance to obtain multifarious knowledge, skill, and consciousness which are considered as components of "citizenship." 2) The consciousness of citizenship will be acquired through the experiences

1．高知女子大学生活科学部生活デザイン学科・助手・博士（生活環境学）Department of Lifestyle Design, Faculty of Human Life and Environmental Scienc, Kochi Women's University, Assistant, Ph. D. Human Life and Environmental Science

of making an effort to develop and adjust the interpersonal relations at each of the different life areas of family, school, and work place. Additionally, it is assumed that citizenship can be strengthened through the insight of the experiences of the communications at those different life areas and by going to and from those areas, which are coming to be realized at total social life areas, and lead to their awareness.

Key words : Citizenship, College Students with Jobs in Society, Acquisition-Model, Active and Reflexive Interviewing Method

1．問題関心と目的

今日，若者が「いかに大人になることが出来るか」という問題をめぐって社会的に様々な関心が向けられている。たとえば，若者の「社会的ひきこもり」や「非正規雇用者」や「ニート」の増加などが問題視されるなかで，若者がどのようにして家庭領域から自立・自律をし，社会領域に移行し得るかどうかは，今日では社会全体が取り組むべき重要な課題として認識されている。そうしたなかで，近年では社会に参画できる人格と市民性を持った「自立・自律[1]した個人」を育ててゆくために学校教育の一環として「シティズンシップ教育」の重要性が指摘され，そのあり方をめぐって各機関で検討されつつある。

「シティズンシップ」とは，近代国家におけるメンバーとしての個人の地位を意味する用語である。それは，個人と国家の間の権利と義務に関する契約を意味する。たとえば，個人は投票や納税の義務を負い，国家は必要に応じてケアや福祉事業の形でサービスを供給する[2]。そして，「社会に完全に参加する状態」が完全なシティズンシップを得た状態である，とみなされる[3]。

近年では，「シティズンシップ」の概念は，若者に留まらず女性・高齢者・障害者といったあらゆる層の人々の「義務」と「権利」を保障し，多様性や公平性をはかるための重要なコンセプトになってきた[4]。価値観が多様化するいま，特に若者にとっての「自律観」もまた，従来の規範の中だけで捉えることには限界が生じている[5]。そうした「多様性」は，今日の社会の基本的価値の特性の一つである。しかし，ここでシティズンシップにイクイティ（平等性）を含めるならば，多様性を認めながらも社会を構成する構成員として，個人が有すべき基本的権利と応分の社会的責務を問う必要がある。そのような意味において，若者の自立・自律を「シティズンシップの獲得」によって計ろうとする動向が近年では強まっており，「シティズンシップ」とは若者の「自律」を議論する上では欠くことの出来ない重要概念と言える。

近年，広範な研究分野でこの概念が用いられているが，「仕事を持ち得る」「経済的に自立し得る」「結婚できる」などといった意味に限定して使用されたり，あるいは独自の拡大解釈がなされる傾向が見られる。こうしたなかで，経済産業省が青年期研究分野で活躍する宮本みち子氏を委員長に迎え，とりまとめた『シティズンシップ教育宣言』[6]における「シティズンシップ」の概念定義には一定の体系性が認められる。よって，本研究においてはこの概念を援用することにする。この報告書によれば，「シティズンシップ」は『個人が自己を守り，自己実現を図るとともに，よりよい社会の実現に寄与するという目的のために，社会の意志決定や運営の過程において，個人としての権利と義務を行使し，多様な関係者と積極的に関わろうとする資質』である，と規定されている。本研究では，このシティズンシップを今日，若者に求められている「自律」を確立するための機能要件として位置づけるものとする。

ところで，社会心理学的な議論のなかでは自立（自律）とは「依存対象」の拡大であるとされる。特に西川による「コンボイの図式」では「依存対象」は「内側（家族）」「中間（仲間）」「外側（社

会)」の３重構造をなしている。特に「中間」は，役割に基づいた人間関係の場とされ，仲間と関わる場としては「学校」が挙げられている。そして，内側から外側に真っ直ぐ依存対象を拡大させてゆく方向が「成長の方向」と捉えられる[7]。以上の３つの領域の枠組みを援用し，特に本稿では，家庭を「私的領域」，学校を「中間領域」と定め，さらに職業を含め，個人の役割遂行がもっとも重要視される場を「社会領域」として論述していく。

本研究では，調査対象者を社会領域に一度参入したのちに，再び学校という「中間領域」に回帰してきたと位置づけられる「社会人学生」に定めた。社会人学生を調査対象とする理由は，前述のように，今日における若者の自律観には相対化が観られ，自律意識の発達は，西川が理念として描く発達プロセスのように必ずしも直線的な「成長の方向」を辿る訳ではないという認識に依拠している[8]。本村はこれまで（自立を可能にする）「自律」とは個（自己意識）から小さな共同体との関わりと，さらに職場などの社会と自身との関わりを取り結ぶ各々の領域を螺旋的に行ったり来たりしながら「獲得されるものである」という仮説を構築してきた[9]。したがって，自律の機能要件としてして考えられる「シティズンシップ」獲得のプロセスを探求にするにあたっても，「職場」という社会領域と「学校」という中間領域の往復を経験する社会人学生を対象とすることによって，「シティズンシップ」の螺旋的な発達過程と個人による多様性が確認できるのではないかと考えた。

以上のような問題意識を基とし，本研究の第一の目的は，若者の自律意識の形成に影響を与える重要な要因と見なされる「シティズンシップ」が，学校という中間領域や職場という社会領域において，どのようなプロセスを辿りながら獲得されるかを，社会人学生を対象に，その多様性に留意しながら質的に把握すること，とした。その上で「シティズンシップ獲得」のモデル構築を目指すことを第二の目的とした。

2．方　法

2－1　対象者

本研究の対象者は，某公立短期大学に通う18歳～36歳までの社会人学生であり，個別に本研究の趣旨に同意を得た男女９人である。主な属性は表１に示した通りである。この９人を対象に，2006年８月下旬～10月初旬にかけてインタビュー調査を実施した。調査時間は一人，約２～３時間程度とした。必要に応じて複数回の面談と，メールによる文書のやり取りを用いて面接データを補完した。調査項目は，厳密には標準化しない半構造的面接法を用いた。

2－2　調査の方法と手続き

本調査では，インタビューの際に複数の面接項目を設けて数時間に渡る調査を実施しているために，量・質ともに相当にボリュームのある調査知見が得られている。しかし，本稿においては，特に「シティズンシップ」に関連すると思われる項目に対応する結果を採り上げて示したい。今回，採り上げた主な「概念コード」（面接コード）は以下のとおりである。

(1)社会人学生に至る内発的動機
(2)シティズンシップと関連する自己および社会とのかかわり
(3)獲得されたシチズンシップ

概念コード(1)は，「シティズンシップ」獲得に至る「個」（自己意識）や潜在的動機に関連すると思われる対象者の主観的事実である。概念コード(2)は，「シティズンシップ」獲得に関連する内容であり，社会人学生になることによって得られた，特に自己および社会とのかかわりのあり方とみられる対象者の主観的事実である。概念コード(3)は実際に獲得されていると判断される「シティズンシップ」の内容である。

対象者たちの「シティズンシップ」をめぐる多様な言説を整理するために，経済産業省が提言す

表１　対象者の属性と学校（中間領域）に移行する際の内発的動機

対象者	性別	年齢	学年	職業・学内の役割その他	内発的動機
A	男性	24歳	2	会社員（学生活動の実行委員）	**学習への意欲**：「仕事をしていく上で、自分はもっと“学”をしっかりつけなければと思い始めたこと」
B	男性	24歳	卒（H18）	編入学の末，４年制大学へ	**何か出来るようになるだろうか，というささやかな希望**：「10代から料理人を目指し，レストランで勤めるが，二十歳の頃，突然何も出来ないほどの気力を失ってしまう。精神科医に勧められ，藁をもすがる気持ちで大検を受験して合格。しかし，学校へは長く不登校だった自分は学校に拒否反応があり，まず多様な社会人学生が集う学校に行ってみようと考えた。学校に行けば何か出来るようになるだろうか・・・と」
C	男性	27歳	2	家業（自治会役員）	**・空いた時間を有意義に**：「父と家業をするようになって以来，夜にぽっかり時間が空いてしまった。学業であれば親も説得しやすいし，行くなら親が元気な今しかない」**・人間関係の拡大**：「会社をやめたことで人間関係が著しく縮小してしまい，新しい人間関係を求めたかった」**・知らないことに対する知的好奇心**
D	女性	18歳	1	アルバイト（編入学希望）	**・希望大学編入へのステップ**：「入学が易しかったから。自分は進学校の高校時代は部活中心で，勉強が出来なかった。希望の４年制大学には直ぐに入学できないと思い，２年後に編入を目指そうを考えた。」
E	女性	20歳	卒（H18）	アルバイト（元・自治会員）	**・社会領域参入までの猶予期間の設定**：工業系の高校に在籍していたが，「卒業後に自分が何をしたいのか，どんな職業に就きたいのか全くイメージが沸かなかった。社会人の集まる学校では年齢層も広いと聞いていたし，いろいろな人に接する機会もあるだろう。社会に出る前にもう少し視野を広げてみたいと思った。」
F	男性	24歳	2	アルバイト（編入希望・１回生まで会社員）	・「社会という一つの集団のなかで働いていくうちに，**自分の知識の無さに気付いた**のが大きなきっかけ。そうした精神的状況として，「会社」という領域に**自分の居場所を確立するのが難しい**と感じたこと ・仕事よりもむしろ社会全般，仕組みについて勉強したい，情報を処理する技術を身につけ，**物事を自らで考察できる力を養いたかった**。
G	女性	36歳	1	看護系	・現在の職業において資格取得を目ざそうと検討中であるが，その前に**学歴へのコンプレックスがあったこと。次へのステップの足がかり**：「卒業後に通信制の福祉大学への編入も検討できると思って。」
H	女性	29歳	1	病院勤務	・あまりに**代わり映えのしない自分の日常への問い**：「これでいいのかな」・何らかの**知的な刺激や，新しい出逢いを求めたい**気持ち。
I	男性	31歳	2	会社員（自治会役員）	・親と暮らすためにUターンで地元に戻ったおり，**職場において「自分が居なくても簡単にその穴が埋まるんだ」と自己効力力が低まったこと**。・「**自分はこのままで良いのか**，自分にとっての武器は何か」と考えるようになる。・自分が今いる世界の「外側」の人と話さねば・「学歴」を少しでも上げて**再就職の際の不安を減らしたい**気持ち。

注）対象者は現在，「社会人学生」という地位を獲得している者が中心であるが，社会人学生を終えて１年に満たない卒業生２名も加えている。

る『シティズンシップを発揮するための能力[6]』を援用する（P.10，図１）。すなわち，図１に示すような「意識」「知識」「スキル」の３次元における９項目を，「シティズンシップ」を把握するための指標として用いた。

なお，この調査では対象者と調査者の間の相互作用によって産み出される価値の創出を目指した「アクティヴ・インタビュー」の技法[10]を採用し，対象者の「社会人学生になる以前」から「現在」に至るライフヒストリーをそれぞれ描いて貰った。そして，対象者によって獲得された「シチズンシップ」の内容とその獲得プロセスに着目して分析を試みた。

３．結果と考察

３－１　シティズンシップに関連する内発的動機

①編入学を目指したい－自己の取り戻し－

表１は18歳から36歳までの対象者たちの大学への入学を決意した経緯，および理由にかかわる言説に注目して，その内発的動機を示したものである（表１）。

表１が示すように，18歳の女性であるＤさんは，現在アルバイトをしながら大学に通っている。短期大学への入学の最たる理由は「編入学」にあった。彼女は，高校時代に勉学よりもクラブ活動に勤しむことを選んだが，現在は「受験というハードルを避けて通ってしまった」という劣等感を抱いていると語る。「希望の４年制大学には直ぐに入学できないと思い，２年後に編入を目指そうと考えた」Ｄさんにとっては，短期大学入学は「希望大学編入へのステップ」としての位置づけがあったと語る。

実際に，短期大学入学後に「編入学」を志す社会人学生は少なくはない。たとえば，Ｂさん（24歳・男性）もまた「ゆくゆくは編入が出来ないかと考えていた」と語る。しかし，実際には「学校へは長く不登校だった自分は，学校に拒否反応があった。でも，多様な社会人学生が集う学校ならば大丈夫かもしれないと考えた」と語る。同時に，Ｂさんの場合，二十歳まで目指してきた社会領域の一つである“料理人になる”という目標の前で，あるとき突然の「無気力感」におそわれた状況を抱えていた。それを何らかの方法で乗り越えたい気持ちが背景にあったと言う。「学校に行けばまた何か出来るようになるかなと思って」というのがその語りである。つまり，「編入学」は念頭に置かれていたものの，学校という中間領域への移行は，その可能性を模索するための手段であり，何よりも「失なわれた自己」を再構築するためのきっかけとして選び取られたと言える。

また，短期大学に通い始めることによって次第に編入学を目指そうと考えるようになったと言うのがＦさん（男性・24歳）である。Ｆさんが当初，入学を決めた大きな理由は「社会という一つの集団のなかで働いているうちに，自分の知識の無さに気づいた事にある」と言う。また，同時に社会（会社）という領域に「自分の居場所を確立することが難しいと感じていた」とも明かしている。

つまり，学校という中間領域への移行は，社会的一員としての自己の未熟さの認識，そして改めて，社会と関わりを新しく再構築するための模索としての位置づけられる。このように「会社」という社会領域への参入経験によって自覚された自身の「資質」の欠如感が，中間領域（学校）で再び地位を確保する際の内発的動機にかかわっていると考えられる。

表１にも示すように，Ａさん（24歳・男性）もまた「仕事をしていく上で，自分はもっと“学”をしっかりとつけなければいけないと思い始めた」と語り，自身の未熟さが内発的動機となっていることが分かる。

さらに，Ｇさん（女性・36歳）もまた，学校という中間領域への回帰によって次第に「編入学」を検討したい気持ちを抱くようになった一人である。Ｇさんは医療の現場で看護の助手的地位に就いている。学校への入学前は，現在の職業上のステップアップを目指し資格取得を考えていたが，仕事を継続しながらその目標を達成するためには，

物理的な時間の制約や経済的な問題が生じると感じていた。また，周囲の親戚の人たちから「大学くらいは出ておいたら」と指摘されるなかで自身には「学歴へのコンプレックス」があることを認識し，夜間通学が可能で，自分と同じように多様な社会人を受け容れる場所に，最初は「何となく入ってみようという」気持ちであったと言う。しかし，次第に「卒業後には通信制の福祉大学への編入もしようと思えば出来る」と意欲を持つようになり，現在では中間領域（学校）への移行は，結果的に「次へのステップの足がかり」になっていると認識している。

以上に示した対象者たちの内発的動機において，「編入学」への志向性が共通していたとしても，その背景や事情は実際のところ様々であり，その様々な理由によってそれぞれのライフコースにおける自己の新しい再構築が模索されている様子がうかがえた。これらの内発的動機を示す「語り」には，「うしなわれた自分」や「これまで持ち得なかった新たな自己の資質」を再び学校という中間領域のなかで“取り戻す”ことへの希求（期待）が見られた。

「自己の取り戻し」の典型事例を示していると思われるのがＩさん（31歳・男性）である。Ｉさんは親と暮らすために都会からＵターンで地元に戻って来たが，退職した職場を振り返った時に，「自分が居なくても簡単にその穴は埋まってしまうんだ」と感じた気持ちを語る。そうした自己喪失感の経験を契機に，「自分はこのままで良いのだろうか」という自己の問い直しが始まる。そして「自分にとっての武器は何か」と自問したり，「自分が今居る世界の外側の人たちと話をしたい」「学歴を少しでもあげて再就職の不安を減らしたい」と考えるようになったと言う。

つまり，職場での自分の地位向上が容易に埋められない事実に直面して，低下してしまった自己効力感を，学校という中間領域に立ち返ることによって取り戻したいとの欲求がここには見られた。

②ライフ（生活）の質の拡大ー人生を豊かにー

一方，職場という社会領域において既に安定的な地位を獲得しているが，さらに自己に新たな成長要素を加え，人生の質を拡大することへの期待が内発的動機に結びついているケースもある。

たとえば，社会領域へ参入してから10年のキャリアを持つＨさん（29歳・女性）は，職場においても家族的で円満な人間関係を実感しており，安定した毎日を送っていた。現在の状況でも何も問題はないものの，「あまり代わり映えのしない」自分の日常に対して「これでいいのかな」と考えたことが中間領域（学校）で学生という地位を得ようとした契機として語られる。「趣味を拡大したり，カルチャースクールなどに出向くことでも，そうした不安は払拭された可能性もあるとするが，学校という場所で「知的な刺激を伴いながら，新しい人間関係を作りたいという気持ちがあった」と説明していた。

また，高校卒業後に家業と関わりの深い職に就いて５年を経た後，２年前から父親と共に家業を支えるＣさん（男性・27歳）の場合，これまで社会領域の職場での労働に消費していた時間を，現在は「余暇」に利用出来たことが中間領域への移行の契機となっている。余暇時間を「親が元気な“今”しか出来ない事」に自分自身のために利用しようと考えたことが大学入学の内発的な動機である，と言う。社会領域では学び得なかった「知らないこと」に対する知的好奇心を満たしたいとの欲求と同時に，「会社を辞めてしまった今では，このままでは人間関係があまりも狭くなってしまう」との不安を感じ，何よりも「新しい人間関係」を拡大することへの希求が強い動機となっている。

以上のＨさんやＣさんの事例は，自己内部にある欠如感を性急に埋めなければならないという自己への期待に応えると言うよりも，社会領域のなかで一定の地位を獲得し，自身の役割遂行を果たすゆとりのなかで，改めて見いだされたり，検討される「選択」の一つを示している言説内容であると言える。

3－2　シティズンシップと関連する自己および社会とのかかわり

次に，職場という社会領域から学校という中間領域への移行と，両領域間の往復によって自己，および他者や社会とのかかわりが，「シティズンシップ」と関連していかに変化したかについて示された対象者の主観的事実の特徴を整理する（表2）。

①自己とのかかわり

たとえばＩさん（31歳・男性）は，職場という社会領域における役割をとりあえず終え，中間領域（学校）に自分の居場所を移したときに，「社会人としての責任からの開放感」を実感すると語っている。その開放感は「学校は職場という社会領域と違い，肩に背負っているものが違う」と言ったＩさんの認識に由来する。この言説は，社会領域での強い責任と圧力のなかで抑制されている自己を，学校という中間領域においては開放し，自分らしさを発揮しながら自己を取り戻している様子を示している。

一方で，Ｉさんは学内で組織的な活動への関わりを深めるにつれて，社会領域における確固とした義務ではない「任意」（自由意志）に依拠した人間同士の連帯によって，何らかの協働的な試みを行うことは，社会領域とは質的に異なる困難さが伴うという「気づき」について言及している。調査時点のＩさんは，その「気づき」によって，固定化された役割期待に基づいて役割を遂行している職場という社会領域での自分自身の姿を省みている最中である。Ｉさんの事例に見られるように，職場という社会領域と学校という中間領域の往復によって獲得していると認知している事柄の一つは，自己に対する認識の変化であり，それは，自己とかかわるための新しい資源とも言える。

②他者との対等なかかわり

「社会人学生として獲得していると認識している事柄」としては，中間領域というミニマムな同属（準拠）集団における「関わり合い」におけるものが多く示されている（表2）。それは，例えば「多様な人々のなかで，自分が関わり合い方を選べるということ（Ｂさん・24歳・男性）」と言うように，関わり合い方を，自ら設計出来る選択可能なものとして考えていることが読みとれた。また，「定年退職者や教員とも，社会人同士として対等に渡り合えるしがらみのない人間関係（Ｇさん・36歳・女性）」や「親以上に年齢の離れた人との対等な交流（Ｅさん・20歳・女性）」，「職場にはない広い年齢層の人たちとの同等で，分け隔てのない人間関係（Ｄさん・18歳・女性）」などといった「語り」に象徴されるように，学校という中間領域では特に「対等性を伴った人間関係」が獲得されているとの認識が特徴的であった。

さらには，Ｈさん（29歳・女性）においては，「教員にも対等に意見が言えるような雰囲気」を持つ学校という中間領域で，周囲の人々と共に「分かり合えないことを話し合ったり，教えあえる関係と，その輪が広がっていくことへの喜び」を，獲得された重要な事柄として示している。以上のように，学校という中間領域で重要とみられる獲得項目は，小規模な関わり合いのなかで構築されてゆく「対等性」や，そうした対等性を伴いつつも，多様な人々の間で分かち合える「共感」であるとも言えるだろう。

③社会との主体的なかかわり

一方，社会人学生たちは，学校という中間領域において「社会」に対するまなざしを改めて学習し直すことによって，社会領域を構成する一員として，社会と対峙する方法を変化させてきている。たとえば，それは「地方自治や経済などの知識を学ぶことによって，自分の生活を送っていくうえでの暮らしや社会に対する視野が広がった（Ａさん・男性・24歳）」といった語りに象徴される。また，学校という中間領域において「シティズンシップ」と関連で獲得した項目は，社会において必要な「知識」に留まらない。それは，Ｈさん

表2　「シティズンシップと関連する自己および社会とのかかわり」および「獲得されたシティズンシップ」

	シティズンシップと関連する自己および社会とのかかわり	獲得された「シティズンシップ」
A	「地方自治や経済などの知識を学ぶことによって，自分の生活を送っていくうえでの暮らしや社会に対する視野が広がった」	②③：「自治会活動は向いているとは思わなかったが，誰も引き受けなければ皆が困るだろうと思い引き受けた。その活動のなかで責任感，信頼関係のヨコのつながりを学んでいる」「周囲は，全体的に自主的な学生活動への参加意欲が低いことを問題視するように」
B	・かかわり：「共同作業が好きで，みなが嫌がることを率先して出来るような人たちに出会えたこと。一つのことを皆で成し遂げる喜び」「知識を与えるというよりも，人間的な部分で敬意を抱ける先生たちとの信頼関係」出逢いの選択性：「多様な人々のなかで自分がかかわりを選べるということ」	①②⑦：「不登校の人たちの話し相手のボランティア活動をするように。同じ体験を持つ自分が，そういったことをするのは必要と考えた。何か役立てたらと思う。してあげるというより対等に話したい。その人と，どういった会話をすべきか，いつも模索している」
C	人生を楽しむ術：「刑法などを学び近年のニュースを見て理解力や世の中を見るまなざしが広がっている実感。勉強をしたことが人生を楽しむ手段になっている」　・多様な年齢層との関わり：「70歳代の年長の人がいて，地元にいるお年寄りと違って話題が豊富で面白い」	「利害関係に縛られない対等な関係が会社と異なる」「自治会活動を通して，長としては協調を重んじる。」「教員に対しては自分も社会領域では違った分野の専門化だという気持ちで接して話をする」→他者も自分も尊重し，人と楽により上手につき合う方法を模索中：②⑦⑨
D	・同級生より一足早く「社会」に出て頑張っている小さな誇り。・広い年齢層の人たちとの職場にはない，同等で分け隔てのない人間関係。・勉学に熱心に取り組む年長者たちからの刺激	①②：「まず，入学において厳しい母親を説得して自分の進むべき道を表明し，意見を貰い，意志決定し，現在は協力を得ていること」
E	・親以上に年齢の離れた人との対等な交流。 ・勉学の上での年長者のライバル ・授業では机上に留まらない生の社会人たちの声を直接得られたこと。 ・自分のなかで自身の好きなこと，嫌いなことが明確に。	⑦：「ゼミで学んだ多様な年齢層の人々とのディスカッション」「学生活動も個人の楽しみでなく，組織として団結するために一つの目標やテーマを持つべきだと思えたこと」②③④：「年長者に誘われれての学祭活動を一緒に自分たちで立て直したこと。自分たちの事は自分たちの手で引き受ける気持ちと使命感。」⑥：「会計の役職につき，お金の流れと組織の存立の関係や，基本的な社会常識を身につけたこと。自治会活動で，仕事は周囲のニーズに合わせなければならないと考えたこと」⑨：「案がまとまらないときに，両案とも良さを活かしてゆく方法を学んだこと」⑦～⑨：「それらを培い，仲間意識を深めるために議論の大切さを学んだこと」
F	・学問を学べる自由さ。 ・幅広い視野で物事を考えられるようになること。	⑨：学生活動を通して「自分が考えた企画を他人に理解して貰える用に説明し，実際にその企画を実行に移すというプロセスを大学で学べている」　⑦：社会領域では他者と協調するのは苦手だと思っていたが，学生活動のなかで自分の能力が集団内でどのような役割を担えるのかを模索中
G	・「定年退職者や教員とも社会人同士であるので，対等に渡り合える，しがらみのない人間関係」 ・自分の仕事に採り入れたいと思える観念 ・社会を自分自身の視点で何が問題なのかを理解のうえ，感じられるように：「分かるから気持ちで受け止められる，頭に入ってくる」	⑦⑧：（人間の背景や社会情勢が）全体として「理解できてこそ，“気持ち”で受け止められる」ことを知った今，自身の仕事（支援技術）にも影響を持つだろう。これまでは感情だけで共感すればいいと思っていた。①②：10代～70代まで居るゼミ仲間たちのなかで，自身が中間的世代であり，上下の世代をつなげられる力があると思えるように。
H	・分かり合えないこと話し合ったり，教えあえる関係と，その輪が広がっていく喜び・社会人との自負ゆえに先生に意見することが出来る対等さ ・人が集えば物事の見方が複数になることをゼミで学び，自身が相対的なものの見方が出来るようになったこと。	⑦⑧⑨：教員にディスカッションの方法について指摘や提案をし，それによってゼミに参加しやすくなった経験。コミュニケーションの方法を自分から変えられたこと。③⑤：選挙報道などのマスコミ情報に踊らされずに批判的検討をしたうえで政治に関与したくなった。①②③：社会に対する自分自身の視点を深めて他者と関わることで，各々の社会の見方も影響を受ける。個→かかわり→社会
I	・学生でいる時，社会人としての責任からの開放感。 ・「学校は社会領域と違い，肩に背負っているものが違う」→個人として自分らしく振る舞えること。	③：「一度でも社会に出ていくことに意味はあるのだ」，と考える。③④：環境，経営論などを学び，地域の活動に自分という人間を活かしたいと考えるように。⑨：自治会活動という“任意”による活動，ヨコの関係が重視される場所での組織的な活動のやりづらさを学ぶ。→「お任せ」でない主体性が協働的な活動の礎

注）「獲得されたシティズンシップ」に示した①～⑨は本文の図1における「シティズンシップを発揮するために必要な能力」の①～⑨に対応している。

（女性・29歳）が「人が集えば物事の見方が複数になることをゼミで学び，自身が社会に対しても相対的なものの見方が出来るようになったこと」と語るように，体系的な知識とさらには対等性をともなった「議論」を通じて社会に対する対峙の仕方を洗練させたとという彼女の認識のなかにも見られる。

さらにCさん（男性・27歳）が「刑法などを学び・・（中略）世の中を見るまなざしが広がっている実感がある。勉強をしたことが人生を楽しむ手段になっている」と語るように，より深まった社会との向き合い方が「個」（自己意識）を高めていると言える。ここには，職場という社会領域から学校という中間領域，そして家庭という私的領域を行き来する自在さと，最終的にはどの分野においても「個」（自己意識）の再構築による自己実現が求められている様子がうかがえる。

最後に，学校という中間領域で獲得した「知識」や社会を理解するための視点や価値観の拡大によって，具体的に自身の職業意識における変革を明示しているGさん（36歳・女性）の例を挙げたい。Gさんは，学校という中間領域での学びのなかで「社会を自分自身の視点で何が問題なのかを理解（出来た故に），患者と共に“感じられるよう”（共感出来る）になった」と語り，「看護」という社会領域で勤めてきた自身が「これまでは（患者を）気持ちだけで受けとめていた」と回想する。しかし，現在は「患者を理解できるからこそ，“気持ち”で受けとめることができる」との認識を示し，これらの獲得された認識が，自身が社会領域に戻るときの大きな資源となり得ることを予感している。自身の経験のみに依存することなく，学校という領域で獲得された社会的知識に対する理解を深めることが，より患者に対する「共感」に繋がるといった認識が中間領域へ戻ることによって新たに獲得されている。以上の事例を見てきたように，職場という社会領域から学校という中間領域への移行と往復によって「獲得している」と認識されている事柄は「自己」「他者」「社会」における多岐の領域で経験する「関わりあい」と関連していることが分かった。

3－3　獲得されたシチズンシップ

次に，学校という中間領域において獲得されたとみなされる「シティズンシップ」に着目するが，ここでは，抽出された対象者たちの多様な語りを分析する枠組みとして『シティズンシップを発揮するための能力（経済産業省，2006）』を用いる[6]ことにする。

図1では，シティズンシップを発揮するための能力は「意識」「知識」「スキル」の3分野に類型されている。

「意識」とは「社会の中で，他者と協働し能動的に関わりを持つために必要な意識」であり，知識は「公・社会」「政治」「経済」に関する知識が挙げられる。また，「スキル」とは「多様な価値観・属性で構成される社会で自らを活かし，ともに社会に参加するために必要なスキル」である。なお，それぞれの次元の意味内容を象徴的に示し，構成する具体的な項目は，図1の①～⑨に記述した通りである。

以上を踏まえて，本研究において抽出された語りを分析したところ，前述した①～⑨のすべてに対応する「シティズンシップ」を発揮するための能力の獲得が，各々の対象者に見られた（表2）。典型的な事例を以下では，紹介しておきたい。

たとえば，Aさん（24歳・男性）は次のように語る。「自分自身は自治会活動は向いているとは思わなかったが，誰も引き受けなければ皆が困るだろうと思って引き受けた。今，その活動のなかで責任感や信頼感などの横のつながりを学んでいる」。こうしたAさんの語りには，中間領域（学校）における自己意識の変容，「他者」との関わりにおける信頼関係，そして職場という「ミニマムな共同体（社会）」への主体的参画を通して，社会のなかで，他者と協働し能動的に関わりと持つために必要な「意識」の芽生えが見受けられる。これはシティズンシップの「意識」の②，③に対

応すると言える。

また，「環境・経営論などを学び，地域の活動に自分という人間を活かしたいと考えるようになった（Ｉさん・男性・31際)」，「選挙報道などのマスコミ情報に踊らされずに批判的に検討したうえで政治に関与したくなった（Ｈさん・女性・29歳)」，「(学生活動で）会計の役職に就き，お金の流れと組織の存立の関係や，基本的な社会常識を身につけたこと（Ｅさん・女性・20歳)」といったような「語り」には，学校という中間領域において「社会」・「政治」・「経済」分野に必要な知識（⑤⑥）を自ら獲得しているとの認識が象徴的に示されていると言える。

さらには，多様な年齢層の人々で構成される「ゼミ」や「自治会活動」という議論の場においてディスカッションの方法を学び，自己をいかに活かして，そのコミュニティに参加するかについての「スキル」を獲得したとされる語りも多く見られる。たとえば「それまで威圧感を感じていた教員に対して，自ら議論の方法について提案をすることによってゼミに参加しやすくなった。それによって周囲からも評価され，まわりとのコミュニケーションの方法を自分から変えることができた（Ｈさん・女性・29歳)」「自治会活動で，仕事は周囲のニーズに合わせなければならないと分かった。案がまとまらないときには，複数の案の良さを共に活かしていく方法を学び，そうしたやりとりを経て，組織の仲間意識を深めるための議論の大切さを知った（Ｅさん・女性・20歳)」などが挙げられる。これらの語りは，図１に示した「スキル」における⑦自己・他者・社会の状態や関係性を客観的・批判的に認識，理解するためのスキルであり，⑧情報や知識を効果的に収集し，正しく理解・判断するスキル，⑨他者と共に社会の中で，自分の意見を表明し，他人の意見を聞き，意志決定し，実行するためのスキルに合致する。

最後に，Ｇさん（36歳・女性）の語りに注目したい。Ｇさんは入学以前に，何らかの形で現在の

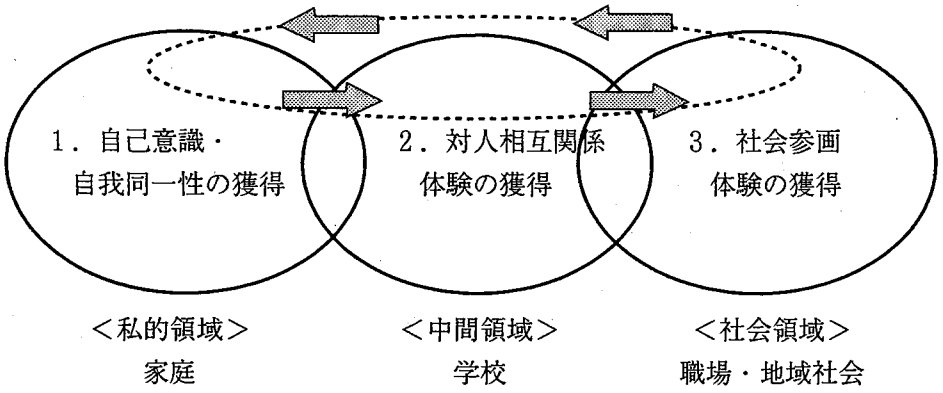
図１　シティズンシップを発揮するために必要な能力

【意識】
社会の中で，他者と協働し
能動的に関わりを持つために必要な意識
①自分自身に関する意識
②他者との関わりに関する意識
③社会への参画に関する意識

【知識】
④公的・社会的な分野での活動に必要な知識
⑤政治分野での活動に必要な知識
⑥経済分野での活動に必要な知識

【スキル】
多様な価値観・属性で構成される社会で，自らを活かし，ともに社会に参加するために必要なスキル
⑦自己・他者・社会の状態や関係性を客観的・批判的に認識・理解するためのスキル
⑧情報や知識を効果的に収集し，正しく理解・判断するためのスキル
⑨他者とともに社会の中で，自分の意見を表明し，他人の意見を聞き，意志決定し，実行するためのスキル

図２　「シティズンシップ」獲得の仮説的モデル



社会（職業）領域における質的なステップ・アップの方法を模索していた。中間領域（学校）への回帰はその足がかり的な位置づけとなり，現在の彼女にとっては，そのことが社会人学生となることへの内発的な動機と見られていた。そうしたGさんは，中間領域（学校）で地位を獲得する以前は，看護助手として，患者に対する深い愛情を感じていたものの「感情だけで共感していた」と認識する。しかし，社会人学生の地位を獲得した現時点においては，次第に「（人間生活の背景や社会情勢などを）全体として理解してこそ，“気持ち”で受けとめられるのではないか」という認識に至る（注：調査者との相互作用的なアクティブインタビューを通して共に発見された内容）。そして，その認識が今後，自身の患者に対する支援技術にとって重要な資源になり得るという意識を持ち得るようになる。

Gさんの例においては，自身の内発的動機に沿って中間領域（学校）と社会領域（職場）での２つの生活領域で地位を獲得し，その領域を往復することによって「シティズンシップ」の意識，知識，スキルが強化され，さらには社会領域に戻ることで，これらの能力が「発揮」される可能性が強く示唆されている。

以上に見てきたような社会人学生の語りの分析を通して構築した『「シティズンシップ」獲得の仮説的モデル』が図２である。

図２に示すように，「シティズンシップ」には理念的にも実態としても，①「個」（自己意識），②「対人相互のかかわり」，③社会参画といった少なくとも３つの次元の「獲得レベル」が存在する。また，図２の点線に沿った矢印が示すように，それぞれのレベルは前段階を内包しながら次なる段階に移行すると考察される。

社会人学生の場合，職場という社会領域への参入後，学校という中間領域に再び移行し，学生という地位を獲得することは＜私的領域＞における「個」の自己意識という内発的な動機に規定される。そして，学校という＜中間領域＞への参入を契機に，従来の内発的動機に従って自己の“取り戻し”，“自己の拡大”が導かれる。

そうした個の自己意識を基盤として，学校という＜中間領域＞といった比較的小規模で多様な人たちによる集団や共同体の中で，対人相互関係の広がりと深まりを経験するようになる。このような学習を経験することにより，シティズンシップとしての資質である「対人相互のかかわり」をめぐる意識，知識，スキルが獲得されていく。

そうして獲得されたシティズンシップの能力は改めて＜社会領域＞である職場に移行する事によって新たに発揮される。同時に，この経緯は対象者の意識レベルでは図２に示した次元の１～３への直線的なものではなく，学校という＜中間領域＞における対人相互の関係が＜私的領域＞における自己意識を新たに規定し，そこで規定された自己意識は，再帰的に，職場や地域社会という

＜社会領域＞への参画の体験による＜中間領域＞の対人相互関係築に影響を与えているものと思われる。

このように，若い成人の「自律意識」の重要な機能要件である「シティズンシップ」は，「自律意識」の形成・発達と対応する形で，螺旋型的な発達プロセスを辿るものとして考えられる。

4．まとめと課題

ーシティズンシップ獲得モデルの構築に向けてー

本研究の主な知見と考察をまとめると以下のとおりである。

①社会人学生が，学校といった中間領域において再び地位を獲得するまでの内発的動機は多様である。しかし，多様な中にも，失われた自己や新たに拡大して行こうとする自己の「再構築」への意識性が認められた。

②中間領域（学校）では，社会人学生は，同属（準拠）集団内での対人相互関係における「対等性」や，社会領域にはない「柔軟で選択的な関わり合い」が得られていると認識している。また，そうした認識と，個々人が社会的に置かれている現在の地位・立場・社会領域との関わり方によってシティズンシップにおける意識，知識，スキルが模索され，より高まっていくと言える。

③本調査の結果によって，若い成人の「自律意識」形成において重要な機能要件である「シティズンシップ」が，「自律意識」形成に対応しながら螺旋型的な発達プロセスを辿るという仮説モデルの構築が可能であることが示唆された。すなわち，「シティズンシップ」の獲得には理念次元と同様に，実態の次元においてもプロセスとステージが存在することが示唆された。

個人は，認知レベルで(1)自己意識，(2)他者とのかかわり，(3)社会とのかかわりを再構築するために，「私」・「中間」・「社会」という異なる3つの領域の往復を繰り返すことによって，より高次元のシチズンシップを獲得していくと考察された。また，それぞれの領域間を自在に往復することによってシティズンシップはより強化され，最終的には社会領域において「発揮している」という自覚までたどり着くと見られた。

今後の課題は，「シティズンシップ」の獲得プロセスを調査対象者が辿る時間的経過に沿って厳密に確認をし，社会人学生だけではなく，一般学生との比較と量的調査によって，その「獲得プロセス・モデル」の信頼性と妥当性を高め，モデルの一般化を目指すことである。この課題達成を踏まえて，今後は今日における若者の「自律意識」の形成と「シティズンシップ」獲得との関連を実証的に明確にしながら，一般的な「自律意識」の発達モデルの構築を目指すものとする。

注および，文献

1）本村はこれまでの研究成果に基づいて「自立」と「自律」概念の区別と双方の関連について整理している（本村めぐみ，2003，博士学位論文「脱親期の母娘関係に関する家族関係学的考察」，奈良女子大学大学院人間文化研究科）。その整理に依れば，「自立」とは自己信頼を伴った個人の独立性を意味し，主として「経済的自立」「身辺的自立」「精神的自立」を含む。一方，「自律」とは他者や社会との関わりを機能させてゆくための「対等・協働性を伴ったパートナーシップ」の確立までを意味し，個としての「自立」を内包したより高次の概念としている。本稿においては以上の知見に基づいて「自律」という表記に統一する。

2）G・ジョーンズ，C. ウォーレス，宮本みちこ監訳，徳本登訳，1996，『若者はなぜ大人になれないのか』，新評論，p16.

3）宮本みち子，2003，『若者が＜社会的弱者＞に転落する』，洋泉社，p167.

4）岩上真珠，2003『ライフコースとジェンダーで読む家族』，有斐閣，p5.

5）本村めぐみ，2003，「脱親期の親子関係における「対等性」認識に関する一研究－脱親期の母娘の認知データを通してー」，高知女子大学

生活科学部編，p47.
6）経済産業省，2006,『シティズンシップ教育宣言』
7）西川隆蔵，2000,「対人異存行動の研究－依存行動についての適応的視点からの検討課題」,『人間文化学部研究年報』，帝塚山学院大学，p1-17.
8）本村めぐみ，2001,「未婚成人子にみる「自立意識」に関する事例研究－その構造的次元の抽出－」，家政学研究vol.48，No.1，奈良女子大学家政学会編，p.17-27.
9）本村めぐみ，2003，博士学位論文「脱親期の母娘関係に関する家族関係学的考察」，奈良女子大学大学院人間文化研究科，p.217-220.
10）「アクティヴ・インタビュー」とは，社会構築主義的なインタビュー論として近年，着目される。従来はインタビュアーだけに焦点が注がれ，回答者から信頼性と妥当性をもった情報を引き出す事のみが問題にされてきた。しかし，「アクティブ・インタビュー」はインタビュアーも回答者も共にインタビューというアクティブな相互行為に参加しており，両方が「ナラティヴ＝物語」の共同製作者であることを明らかにしている（ジェイムズ・ホルスタイン，ジェイバー・グブリアム，山田富秋ほか訳，2004,『アクティヴ・インタビュー－相互行為としての社会調査』，せりか書房）。